

鶴岡と茨木のり子

茨木のり子の詩作と筆り上げた。

そのコラムで筆者は、『倚りか
翠年から、再生可能
からず』自分の感受性くらい『わ
エネルギーの業界紙で
たしが一番きれいだったとき』の

筆者活動の

柱になっている詩人

筆者は下段欄にあるように山形
いる。この10年間、鶴岡との関
影響を受け、今日に至る
ことになり、初回(15年1月26日
発行)に「茨木のり子のメッセ
ジを寄稿した。連載コラムのテ
マは「いろは順」に書く決めて
いたので、茨木のり子を初回に取
り残してはならない。…、…」

恒例となる

イベントを開催

茨木のり子の詩作の紹介は、19
年からは恒例のイベントとして
行っている。初回のイベントは19
年11月9日に東京都江戸川区のタ
ワホール船堀で、『倚りかから
ず』茨木のり子の詩から知る平
和の大切さと友好のきずな」と
して主催した。この年が、学童疎
開から75周年で、当時、江戸川区
の児童が鶴岡市に学童疎開したこ
とにちなみ企画催行した。

1950年山形生まれ。
東京都立大卒。元千葉大
大学院工学研究科准教授
(金属疲労専攻)。金属疲労
の研究のほか、他分野の
テーマの研究開発に努める
とともに日本各地の地域お
こし活動に従事する。ロー
カル鉄道と地元の酒蔵のコ
ラボで地域再生を図る地酒
「鐵の道」の製造・販売を企
画(すでに10件を超える銘
柄を送り出している。一般
社団法人洗楓座)代表。一
般財団法人「エココミュニ
ティ」代表。



茨木のり子のイラスト(山本誠・画)

地元力発見!

佐藤建吉 「洗楓座」代表

41
には、「2014/5
/16(金) 16:
56」である。これが、



「荘内日報」による地元への案内記事

2021冬／子2022秋／対話を企画催
「歳月」としてした。23年度も継続して茨木のり
企画開催。年子の作品を、朗読のほか音曲を交
末&クリスマえて開催し、その詩情を社会に伝
えたい。
り楽しんで頂 なお、鶴岡市や酒田市を地域と
けたようである「荘内日報」には関連の行事
において名義後援を得て、開催予
告記事などとして地元へ伝えて頂
野真軽井沢で